
夏の日

エイプリル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の日

【Nコード】

N8819A

【作者名】

エイプリル

【あらすじ】

ある夏の日、少年は不思議な少女に出会いました。二人は再び出会う事を約束して別れました。その日から、少年は人が変わってしまったように少女を探しますが、見付かりませんでした。そして、月日は経ち、少年は少女の事を忘れて青年になりました。とても暑い日、青年は久しぶりに外に出かけた。ただ、清涼地を求めてぶらぶらと商店街を抜け、隣の近くへそして、少女の元へ……

「また会おうね……」

僕がヒカリと交した最期の言葉だ。

残念ながら、その時の状況は覚えていない、確か五年くらい前の夏の夜だったと思う。

そのかわりに、ヒカリの事はよく覚えている。肩くらいしかない短い黒髪に見たものを魅了するような緑色の瞳、驚くほど白い肌に淡い紅色の浴衣をはおった少女だった。

出来ることならもう一度会いたい……。もう何年も捜しているが、ヒカリを見たという噂すら聞けなかった。

それでも僕はヒカリを追い求めたが、環境の変化とともにそれが困難になり、周りの変化に巻き込まれて、しだいに記憶から薄れていった。

辛うじて覚えている事は。

「また会おうね……」

という約束の言葉だけだった。

「いつそ殺してくれ……」

今年の夏は希にみる猛暑だ。涼もうにも、僕の家にある年代物のエアコンは、煙をあげてもはや使い物にならなかった。日陰のある庭の縁側に座っていた僕は尋常ではない言葉をくちばしっていた。

僕は氷の入った洗面器に両足を沈め、左手でうちわを扇ぎ、右手に持ったタオルで額から吹き出る汗を拭った。口にはアイスをくわえているが暑さのせいではほとんどが地面の栄養なっている。

タオルを首にかけて、のそつと立ち上がり歩き出した。途中、台所でアイスの棒を流し場に投げ捨て、玄関のほうに向かう。玄関先にある黒電話の受話器を汗ばむ手で握り、ダイヤルを回した。

「……………」、留守番電話サービスです。只今、電話にでられません。

発信――」

「やっぱ、いないよな。」

友達に電話をかけたが、案の定出かけていた。

僕は窓の外を、遠くを見るような眼差しで見た。

「今頃、雄也は海外でバカンスだし、博人も田舎に着いた頃かな」

「こんな事なら、母さん達と田舎に行くんだった」

ふうつとため息をついた。

すると、夏の暑さが弱気になった僕の足にまとわりつき、体中をはいずりまわった。

だんだん、と体が重くなり、動くのが面倒になってきた。

近くの壁に体をあずけ、死んだように動くのをやめた。

.....。どこからともなく一筋の風がふいた。

その風は僕にまとわりついたじめじめを一掃し、同時に活力を運んできた。

だらだらと立ち上がり、階段をのぼった。

一段あがるごとに、全身の毛穴から汗が湯水のように沸きだし、階段に軌跡を残していた。

ようやく、部屋の前に辿りついた僕は、ドアノブを掴んだ。

「あちい！」

慌てて手をはなした。

ぴりぴり、と指先に電気がはしってかなり痛かった。

痛みを我慢してドアを開いた。

部屋の状況を見た僕は啞然とした。

あまりの温度差で部屋の中の物がぐにやぐにや、と曲がってみえたからだ。

どうせ、錯覚だろうと決めつけて、中に入った。

温められた空気が僕の動悸を狂わせ、目の前が歪む。心臓を落ち着かせようと肺いっぱい空気を吸い込んだが逆効果だった。

突然、熱風が入ってきたために肺が異常を起こし、呼吸困難になったからだ。

命かながら、部屋から脱出した僕は、新鮮な空気を取り込み落ち着きを取り戻した。

（少し、様子を見ることにしよう）

僕は壁におっかかり、腰をすえて、部屋の様子を見守ることにした。しかし部屋の様子は全く変わらない。

「げっ……」

僕は重大な事実に気づいてしまった。

部屋の窓が閉まっていたのだ。これでは熱が無くなるわけがない。はあと深くため息を吐いた。

その後、大きく息を吸い込み。僕は決死の覚悟で部屋に突入した。最奥のベッドまで一心不乱に走り、ベッドに置いてある着替えを驚掴みにして無事部屋から脱出。

そのまま、汗だくの額を着ているシャツで拭いながら風呂場へ直行した。

冷水のシャワーを浴び、服を着替えて外へ、僕は住宅街を抜けて商店街まで歩いたが、人どころか猫の姿すら見ていない。

頭皮がちりちりと痛い。帽子をかぶるべきだったと今更ながら思う。喫茶店の看板が見えてきた、自然と足が軽くなった気がする。

しかし、中の様子が見えたら鉛のように重くなった。

満員御礼とはこういうことをいうのだらう。喫茶店は溢れるくらいぎゅうぎゅうに人が密集していた。よく見てみるとエアコンがあるう店はあらかた満席だった。

僕は諦めて商店街を後にした。

「ワアアアア」

賑やかな声が聞こえた。

声のほうに顔を向けると河川敷で子供達が野球をやっているのが見えた。スコアボードを見ると始まったばかりだったようでもまだ得点は入っていないかった。

グラウンドを見たら二塁三塁のチャンスだった。次のバッターらしき子供が何度も素振りをしている。ここから見ていても分かるくらいに気合いが入っている。バッターボックスに入った。ほぼ同時に僕も歩き出した。

この子供がヒーローになれたかどうかは、直ぐにチームの歓声で分かったが、別に興味がなかったので聞き流しながらまだ見ぬ清涼地を目指した。

迫りくる熱気は無防備に浴び、熱中症寸前の僕の目の前に鉄橋が見えてきた。

どうやらここは隣町の近くのようだ。（こんな遠くまで出歩いたのは久しぶりだ。一体何時だったかな？）

そんな考えを巡らしながら土手の下の河原に降りた。

水のせせらぎを聞いていると幾分ましになったが、まだ暑い。

ここよりは涼しそうな橋のしたの日陰に近づいた。するとたくさんの丸い光が一斉に僕を睨む。さらに低い唸り声が僕を威嚇する。

これ以上進んだら、やられると本能で悟った僕は、じりじり、と後退した。光が見えなくなると、一目散に逃げだした。

どこまで走ったのだろう。

ここはあまり人の匂いのしない、少し霧がかった不思議な場所だった。でも、僕には懐かしい感じのする場所だった。

さっきまでの、へばりつくような暑さが、嘘のように消えていた。微かに水の音が聞こえる。

僕は音に導かれるまま進んでいった。

だんだん、水音が大きくなるにつれ、女の子の楽しげな声が聞こえてきた。

河原がはっきりと見えてきた。女の子は川遊びに夢中で僕に気づいていないようだ。

見た目は小学二、三年生くらいの少女だ。
その楽しそうな光景を眺めていると、少女は動きを止めた。
観察するように僕を見ている。

僕は少女の緊張をとくために、人の良さそうな笑顔をしようと無理矢理、にっ、と笑顔をつくって見せた。

きつと、うまく出来てないだろう……。唇の両端を持ち上げた筋肉が、ぴくぴくと軽く痙攣して痛いからだ。

僕の想像通り、少女はますます警戒している。今にも逃げ出しそうなくらいだ。

気まずい空気が漂い始めた。

「もう……限界」僕は笑顔を解いた。

すぐに口を大きく開いたり、閉じたり、伸ばしたりして顔の筋肉をほぐした。

「くすくす……」

少女が口を押さえて笑っていた。

「やっと笑ってくれたね」

僕はほっとして、表情が緩んでしまった。

スツと、ひんやりとした何かが僕の左手に触れた。

見下ろすと少女の小さな両手が僕の指を引っ張っていた。

少女はそのまま走りだした。

川沿いを上流に向かって進んだ。進むにつれて霧が濃くなっていくぼんやりと公園の遊具が見えた。

少女は僕の手を離し、公園に走っていった。

僕も少女の後に続いた。

少女はブランコに乗っていた。

少女は足をじたばたさせているがブランコはちっとも動かない。

少女はうつむいてしまう。

僕は後ろからブランコを押す。

少女は楽しそうにしている。

「もっと高くしてあげようか？」

少女は少し考えるような仕草を見せて頷いた。

「ちよつと両端あけて、……それくらいでいいよ。じゃあ足乗つけるからね」

僕はブランコに立ち乗りをした。

少女を見下ろして。

「しっかり、鎖は握ってる？振り落とされないでね」

視線を真正面に向けゆっくりとブランコを揺らしはじめた。

「せーの！」

上体を大きくそらし、勢いよくブランコを振る。

鎖が軋む音が激しくなるにつれて、ブランコは空中高く舞い上がった。

遠くから足音が聞こえる

何人かの子供が霧の中から現れた。

どうやら、少女を呼びにきたようだ。

少女は、ブランコから飛び降りて、子供達の元へ小走りで近付いた。何か話しているようだが、僕には聞こえなかった。

子供達は戻っていった。

少女も僕の方に小走りで戻ってきた。

しかし、数歩手前で立ち止まった。

僕を見据えて。

「また遊んでくれてありがとう。けんちゃん」

心を暖かくするような満面の笑顔だった。それ以上に緑色の目が魅力的で僕の心を激しく揺さぶった。

「……その緑色の瞳。僕は知ってる。でも、どこで」

僕はあの日、ヒカリとこの公園で遊んだことを思いだした。

「……ヒカリちゃんなの？」

信じられないように少女に言った。

「やっと思い出してくれたね。けんちゃん」

ヒカリは嬉しそうに微笑んだ。

僕はヒカリに近づこうとするが、何かに遮られてこれ以上進めなかった。

「ずっと、ずっと探したんだよ。……今までどこにいたの？」

「ごめんね。けんちゃん。……………」

ヒカリは申し訳なさそうに視線を落とした。

「言いづらいなら、別に言わなくていいよ。」

僕は気遣うように言った。

ヒカリは顔を上げた。

「最後のお願い、聞いてくれる？」

「ヒカリちゃんのお願いなら何だっていいよ。それでお願いって？」

「ありがとう。けんちゃん」

「じゃあ……………」

「私を忘れて」

「え」僕は呆然としてしまった。

ヒカリは話を続けた。

「ずっと、後悔してたの。あの時、『またね』って言ったこと」

「でも、今は良かったって言えるよ。だってまた、けんちゃんと会

えたんだから」

「でも、本当に驚いたんだよ。まさか、もう一度『ここ』にきてく

れるなんて。姿は変わっちゃってたけど、すぐに分かったよ。だっ

て同じことするんだもん。また、笑っちゃったんだからね……………」

ヒカリの緑色の瞳がうるんでいた。

「でも、もうここに、…………私に会いにきちゃダメだよ。そのために

も」

両手で涙を拭った。

「私を忘れてください」

ヒカリは目尻に涙を浮かべ、優しく微笑んだ。

「待ってよヒカリ」

僕はヒカリの手を掴もうと手を伸ばす。

突然、霧が僕に襲いかかり。ヒカリが見えなくなった。

その霧のせいで体が自由に動かない。

しかし、すぐに霧は薄れていった。最初に目に入っただのは、夜の闇に負けじと輝く星だった

辺りを見回すと、隣町近くの河原だった。

何があつたか全く思い出せない。

僕は思い出しちゃいけない気がした。

遠くから祭りの賑やかな音が聞こえる。

ぐうっ、と腹が鳴った。

「何かお腹すいたな。出店で何か食べるか、出来れば、焼きそばとか味が濃いもの」

たわいない事を呟きながら河原を後にしようと土手の方を振り向いた。

目の前を何か光るものが通り過ぎた。

蛍だった。淡い光が僕の顔を照らしている。

目で追っていくと、僕の掌にちよこん、と乗った。

弱々しい光が、徐々に力を失い消えてしまった。

その瞬間、頬を何かが流れた。

「あれ、涙がとまらない……」

涙は掌に落ちて、蛍を濡らした。

僕はその場に座り込み、しばらく泣き崩れた。

祭りの音が聞こえなくなり、僕は蛍の亡骸を土に埋めて、音もなく立ち上がった。

僕はかかしのように動かなかった。

「けんじ〜。何やってんだ」土手の上から声がした。

見てみると、数人のクラスメイトらしき人影が、電柱の近くから僕を呼んでいた。

「いや、何でもないよ」

「ん？ 聞こえね〜。何だって？」

「何でもないって言ったんだよ！」

土手をのぼりながら僕は応えた。

電柱の近くまで近づいた。

やっぱりクラスメイトだった。その中に知った顔が一人いた。

「俺らは祭りの帰り」

和也は僕の言葉なんてお構い無しに言った。

「俺ら今からカラオケ行くつもり。そうだ！　せつかくだから一緒に行かね？」

僕は少し戸惑った。

「カズ。早く行こうぜ」

クラスメイトの一人が急かすように言う。

「ああ。今行くから、ちょっと先に歩いてるよ」

「おう。早くこいよな」

和也以外のクラスメイトが暗闇の中に消えていった。

「で、どうするよ？」

「行くよ」

「……………は？」

和也は固まっていた。

「どうした和也？」

「いや、けんじが誘いにのるなんて、すげえ久しぶりだからさ。ちよつと驚いたよ」

「そうかな。そんなに久しぶりかな？」

僕は疑問混じりに言った。

「そうだな。…………四、五年振りだな。お前、その頃からおかしくなったからな。好きだった野球の練習だつてこなくなつただろ？」

「…………よくそんな昔の事覚えてるな」

「当然だろうが！　俺ら親友だろ」

「…………そうだったな。和也。今までごめんな」

僕は頭を下げた

「いいいいいよ。謝る必要なんてないだろ。これからの行動で示してくればいいって」

和也は恥ずかしそうに頭をかいている。

「ああ。努力するよ」

僕は笑うのを堪えながら応えた。

「湿っぽい話はこれで終わりつと。急がないとあいつら店に着いちまう。走るけど大丈夫か？」

「バカにするなよ。クラスで一番速いの誰か忘れたのか？」

「そのへらず口も久しぶりだな。……じゃあ行くぞ」僕は暗闇の中に全速力で突っ込んだ。

その時の僕の心は、とても充実していて、何でも出来る気がしていた。

（終）

（後書き）

ぐしゃぐしゃな文章で本当にすみません。最後まで読んで下さって
ありがとうございました。

たぶん、いや、間違いなく意味不明だったと思います。これが僕の
今書ける精一杯です。アドバイスや感想のほう頂けたらとても助か
ります。宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8819a/>

夏の日

2011年1月19日23時37分発行